

松尾正路名誉教授の退官を惜しむ

実 方 正 雄

本学名誉教授・松尾正路氏は、昭和4年7月に、本学の前身である小樽高等商業学校の教官として来任せられ、昭和43年3月、停年の故をもって退官なされたのであるから、39年近くにわたって、研究・教授に専念せられたのであり、その生涯の最も重要な部分を本学のために献げられたことになる。その間、研究面でも、教育面でも、さらには学内行政面でも、本学発展のために寄与された功績は、まことに大きいものであった。私は、同氏の退官を深く惜しむとともに、その御功績に対して、心からなる感謝の意を表明したいと思う。

同氏の専攻分野は、フランス語およびフランス文学であって、本学でもフランス語を教え、フランス文学を講じてこられた。その造詣はきわめて深く、かつ多彩なものであるが、とくにマルセル・ブルーストに親しまれ、その方面の優れた研究業績を発表しておられる。そのうえ、豊かな文学的心情に恵まれ、人間性にかんする鋭敏な感受性を持ち、これを基底とした数多くのエッセイも書き、そのエッセイ集の刊行も近いと聞く。まことに嬉しいことである。私は、40年以上も社会科学の研究に没頭してきた一学究にすぎず、専攻の分野を異にするから、同氏の業績の内容について語る資格は全然ない。だが、つぎのような私の印象は誤りであろうか。パスカルがその「パンセ」の中で、「幾何学的精神」と「微妙の精神」とについて説いていることは有名であり、「パンセ」自体が後者の直感的な鋭さで貫かれているように思われるが、同氏は、直感的に真実をつかむこの「微妙の精神」というフランス的な特色を身につけている、という卒直な印象である。

しかも、私は、若い日には文学青年として、社会科学の研究に専念してか

らは、できるだけ時間を割いて、フランス文化、とくに古くはパスカル、近くはアナトール・フランスやロマン・ローランなどに傾倒してきたが、結局、摂取できたものはきわめて少なかつただけに、同氏が、その好きなフランス語およびフランス文学の研究にその生涯を打ち込み、最もフランス的だと思われる「微妙の精神」を存分に吸収されたことに対し、深甚な敬意を表するとともに、むしろ、羨望の念さえ禁じえないのである。

それはともかくとして、同氏が本学に刻まれた足蹟は、まことに大きい。その足蹟を敬慕し、関係教官の皆さんが協力して、それぞれの分野の論文を書き、記念号を編集することになったのは、麗わしい感謝の表彰であるとともに、同氏にとっても、貴重な記念塔になるものと信じる。

私は、同氏が、今後とも、ますます御健康で、学界のため、教育界のため、さらに御活躍せられることを、心から祈ってやまない。

(1969・1・28)